

上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について

大里 浩 秋

はじめに

筆者は2002年春から1年間、在外研究の機会を得て上海に滞在した。そこで何をするかを考えてすぐに思いついたいくつかのテーマの中に、上海社会科学院歴史研究所（以下、歴史研究所と略称）に通って宗方小太郎資料を読むということがあった。そこで、上海に発つ前に宗方氏本人にあいさつをしておかねばという気になって、直前ではあったが熊本市小峰墓地にある彼の墓に出かけた。広い敷地を見回して限られた時間でさがしだせるかと一瞬不安になったが、管理人から複数の有名人の墓の位置を書きこんである見取り図をもらったおかげで、すぐに目的地に着くことができた。宗方の墓はこちら、と書いた矢印のすぐ先に、彼の墓と記念碑が整然とはいえない並び方で建っていた。記念碑は特大ではないまでもなかなか立派なもので、「宗方小太郎君之碑」の文字は、清朝復辟などで宗方と関わりがあった鄭孝胥が揮毫したことがわかった。ところが、台座の四方に刻んだ碑文が長年の石の汚れのために判読不能の状態になっていた。残念に思いながらその場を離れ、上海に行って歴史研究所で見ていた宗方資料の中に、この碑文がはっきりうつった写真があって、さっそくコピーをとらせてもらった。それは以下のような文である。（旧字体を新字体に改め、句読点を加えた）

君通称小太郎号北平、宇土之人也。君天資俊邁、夙有四方之志。弱冠就藩儒草野石瀬修学、最好読史。後見知於佐佐克堂、明治十七年清仏開戦、乃随克堂航于上海。弁髪修語欲以有所為。二十年変装擬清人歴遊北方九省、如夫東三省雨節、旅行最極艱難。

云君與荒尾東方斎相善。二十三年東方斎在上海開辦日清貿易研究所、君助之致力者不尠。二十六年畢業於研究所者一百三十余名、研究所亦即時解散。於是君回東京、歴問朝野名流披瀝対清策、西郷海相最傾聴君之言。二十七年征清之役興、君亦万死入威海衛、報告敵艦隊之出動有殊勲。旋經上海還広島大本營、明治天皇以功破格賜謁。君感激不措、語知友曰、小太郎畢生之願足俟。二十九年君在漢口、経営漢字新聞漢報。三十一年近衛霞山與同志者創立東亜同文会、君與有力焉。三十三年拳匪之乱後、君有所感断髮。三十七八年日露之役、君奔走南北視察形勢有所貢獻。四十三年君漫遊欧米、帰後在上海設立東方通信社。大正十二年一月君在上海罹病、二月三日終焉逝世。春秋六十。病革報達天聰、特旨叙従五位賜勲三等。配内田氏由紀子。君逝既数年、友人胥謀樹一碑於墓畔、勒君略歴垂之不朽、以表追慕之忱。

昭和二年丁卯秋

友人井出三郎 撰並書

墓所ではとても読み取れなかった文を上海で写真を通じてわかったうれしさから、思わず全文を引用してしまった。が、この文を使って宗方の経歴を紹介するためには、かなりの程度に補充の説明が必要である。そのことを承知の上で、そのための準備ができていない筆者としては、宗方の経歴を綴る仕事を今後の課題として残したいと思う。

ところで、筆者が宗方のことを調べてみようと思ったきっかけは、筆者の同郷（秋田県鹿角市毛

馬内)である石川伍一の関係資料を調べている際に、石川の親友として彼の名がしばしば登場したためであった^{*1}。元治元(1864)年生まれの宗方は、慶応2(1866)年生まれの石川とはほぼ同年代であり、宗方が中国に渡ったのが明治17年、石川は翌18年である。そして18年中に2人は上海で意気投合して、以後、漢口の楽善堂の活動でも顔を合わせているし、海軍の情報収集活動に従事している点でも共通している。石川は日清戦争勃発時に天津で逮捕処刑され、一方の宗方は逮捕の網をくぐり抜けて生きのび、以後30年近くも中国の情報収集を継続しつつ、日中関係のさまざまな局面に立ち合っていく。志半ばで倒れた南部出身の石川と、多くの同郷と共に中国に進出し長く現地に滞在した熊本出身の宗方の生きざまを比較して、明治から大正にかけて興亜を叫んだ青年たちの行動をとらえ直してみたいと思ったのである。

筆者の知る限り、宗方の経歴をまとめたものとしてあげられるのは、東亜同文会編の『対支回顧録』下巻^{*2}列伝に載った「宗方小太郎」と、馮正宝『評伝宗方小太郎』^{*3}である。前者は、誰の筆になるかは不明ながら、昭和10年代ますます日本が中国への軍事攻勢を強める中で、かつて中国への進出の土台を築いた功績者として宗方を称える立場で書いているのは明白であり、宗方の日記や漢詩を随処に引用しつつ、その立場を補強しているのである。この文が書かれたあと、宗方の弟子である波多博が、彼の伝記や資料を一緒に載せた本を作るべく、知人から宗方回顧の文を多数集め、宗方の文章や写真などもたくさん準備していたが、敗戦間際の上海での編集作業とあってみれば、思ったようにははかどらずに頓挫するという一幕があった。もしもこの本(『宗方北平先生全伝』という題名が用意されていたようである)が予定通りに出版されていたら、その後の宗方研究にとって益するところが大きかったであろう。

次に後者であるが、著者が歴史研究所に勤務していた際に、所蔵の宗方資料の整理にあたっていた関係で、その資料を読みつつ分析を進め、日本に留学してからはさらに日本にある関係資料を調べて、ついには一冊の伝記にまとめたものである。

この本の強みは、なんといってもつい最近まで門外不出だった歴史研究所の資料を利用していることであり、加えて日本での資料調査も丁寧に行って、経歴の不明な部分をかなり明らかにしている点である。しかし、前者における宗方の日記のつまみ食いの利用とは異なるものの、宗方の行動を否定的にとらえようとする余りに、それらの資料をそのための補強材料に使っている嫌いがあり、日記その他の宗方の資料が、当時の日中関係を把握する上での豊富な内容を潜在的に具えているという側面を軽視している、あるいはそういう側面に気がついていないと思える利用の仕方をしている点は、もったいないことである。そう指摘した上で筆者としては、宗方資料をそのようなつもりで読み始めたいと考えている。

ところで、なぜ宗方資料が歴史研究所に所蔵されているかはもっと早くに説明すべきであった。それは、上にもふれたが、昭和14年頃に弟子の波多博が伝記編集の作業を進めるべく、宗方の遺族から多量の資料を借り受けて当時の彼の活動拠点である上海に持ち込んだものを、敗戦後日本に引き上げる際に上海当局に没収され、その後その資料が蘇州の古本屋に並んでいたのを、歴史研究所の関係者が購入して、その所蔵となって今に至っているからであり、その間の事情は馮正宝「中国残留の宗方小太郎文書について」^{*4}で知ることができる。他方、弟子が借り出さずに遺族の手に残っていた資料は、戦後しばらくして国会図書館憲政資料室(以下、国会図書館と略称)に保管されることになり、その大部分は整理された上で神谷正男編『宗方小太郎文書』正・続^{*5}として公刊されている。

さて、筆者は上海滞在中、歴史研究所所長熊月之先生や2002年に本学で半年間研究員だった陳祖恩先生、図書館職員の方々の協力を得て、宗方資料を読むことができ、資料の一部をコピーすることができた。以下に、その際に得た資料に基づいて、日記、報告類を中心として歴史研究所所蔵分の宗方資料の目録を作り、さらには、ほんの一時期的ではあるが、日記を書きおこして紹介することにした。

- *1 石川伍一の経歴を紹介したものとして、拙文「石川伍一のこと」(『人文研究』第135集, 1999年)と「湖南と伍一」(『湖南』20号, 2000年)がある。
- *2 原本は昭和11年(1936)年刊。再刊本は明治百年史叢書中の一冊として昭和43年(1967)年に出了。原書房。
- *3 1997年, 熊本出版文化会館。
- *4 『評伝宗方小太郎』所収。
- *5 「正」は昭和50(1974)年, 「続」は昭和52(1976)年の発行。明治百年史叢書, 原書房。

1. 歴史研究所所蔵の宗方資料の概略

歴史研究所所蔵の宗方小太郎関連資料については、上述の「中国残留の宗方小太郎文書について」で紹介されていて、大いに参考になるが、歴史研究所で編集した、全部で18冊に綴じたまとまりに従って説明しようとしているので、執筆の年代が前後したり、宗方本人のものとそうでないものが混じっていたりして——つまり編集の不適切さをそのまま反映しているということだが、わかりにくさが多分に残るものであり、また、特に日記については簡単にすぎる説明になっているところがあって、これから日記を活用しようとする者には不便な整理の仕方になっている。そこで今は、日記、および日記に次いで資料が多量に保存されている報告類を、判明する限りで時間順に並べ目録の形で紹介する。さらに、日記や報告以外の資料については、筆者のチェックがいまだ不十分であるために、その一部を紹介するに留める。

(1) 宗方の日記および紀行文

ここでは、宗方の日記と紀行文を一緒にして、時間の順に並べることにする。彼は紀行文を日記と並行して書いている場合もあるが、紀行文を書いている時には日記を書いていない方が多く、また紀行文の中に日記的な要素を含めていることもあって、一括して扱った方が便利だからである。以下、それらを並べるにあたって前提とすべき説明を2, 3加えておきたい。

a. 宗方が日記を書き始めたのはいつかは断定はできないものの、それ以前になくて明治20(1887)年初からの記録は散見するので、少なくともその年からは日記あるいは紀行文の形で書きつぐようになったと考えることができる。ただし、

明治20年初から同年4月までの部分が、今数日分のみ見ることができるのは、昭和10年代に彼の伝記を作る準備で原稿用紙にその数日分を書き写したのが残っているためであり、原件はその後行方不明になったのではないと思われる。

b. 日記は、亡くなる直前の大正12(1923)年1月まではほぼ毎日書いているといつてよい程だが、時には書けない事情があったのか、あるいは書いたけれども紛失してしまったのかで、短くて数日間、長くて数ヶ月間、欠落していることがある。そこで、数日間の場合はともかく、長い期間の場合はその旨注記することにした。また、国会図書館に所蔵されているものはその欠落部分の全てではないがかなりを補うものなので、歴史研究所所蔵のものを並べたあとに、参考までにまとめて記すことにする。

c. 日記を書くのに使った用紙は、縦線が入ったものも入っていないものもあるが、B4程度の大きさである点は一定しており、それに日付ごとに縦書きに毛筆でぎっしり書いてある。旅の移動でも同様の紙を持参して書き継いだと思われるが、調査に集中した時は別にメモ書きをしておき、どこか腰を落ちつける場所に着いてから、普段使う用紙に書き写したことは日記のところどころにある、〇〇紀行を作る、という表現から知ることができる。宗方は自ら日記を一定期間ごとに一まとまりにして「〇〇日誌」あるいはただ「日誌」とか「日乗」と題して綴じ、紀行文には全て「〇〇紀行」と名前をつけて綴じて、保存を期したものと考えられる。歴史研究所でも、その綴じ方のままにほぼ時間の順に整理して所蔵しており、原件は『日記』第1冊から第8冊までに、原稿用紙に適宜書き写した日記は第9冊に収めている。ここでは、「〇〇日誌」と題したものののみその名を記し、その日記ないし紀行文を書いた期間に滞在した地名をつけ加えた(地名は、宗方自らが、表紙に書いているものも一部あるが、それ以外は歴史研究所が整理する際に表紙にメモ書きにしたものがあるのでそれを利用し、欠落があるところは大里が補った)。さらに、歴史研究所の編集に従い、各日記、紀行文が収まっている冊数を記した。目録中に『日記』第9冊とか、B16『北支那漫遊

記』とか記しているのは、その例である。

- 明治20(1887)年1月3日, 2月11日, 19日, 4月9日, 10日, 12月1日

…以上『日記』第9冊所収。

- 明治20年4月10日-12月11日「北支那漫遊記」江蘇省, 山東省, 直隸省, 盛京省, 山西省, 河南省, 湖北省, … B16『北支那漫遊記』所収。

- 明治21(1888)年5月18日…『日記』第9冊所収。

- 明治21年5月19日-12月31日「往返日記」上海, 漢口, 熊本, 上海, 天津, 北京。

- 明治22(1889)年1月1日-明治23(1890)年1月1日-1月24日「燕京日誌」, 北京。

- 明治23年1月25日-30日 北京から漢口に向けて陸路移動中, 湖北襄陽で27日間の記録を紛出したとのことわりがあり, そのうちの6日分だけをあとから思い出して書き加えたもの。

- 明治24(1891)年4月18日-10月15日 上海。

- 明治24年10月16日-明治25(1892)年4月30日 上海。

- 明治25年5月1日-8月31日 上海。

- 明治25年9月1日-12月31日 上海, 熊本。

- 明治26(1893)年1月1日-5月31日 上海, 熊本, 東京。

- 明治26年6月1日-12月31日 東京, 熊本, 上海, 漢口, 上海。

※この最後に「岷江四日記」, 11月10日-14日, を付す。

※続いて, 「武漢聞見随録」(表に, 26年11月より12月15日まで, 27年3月より, とのメモ書きがある)を付す。

…以上は『日記』第1冊所収

- 明治27(1894)年1月1日-6月26日 上海, 漢口。

- 明治28(1895)年1月1日-3月8日 広島。

- 明治28年3月8日(続き)-22日 広

島。

- 明治28年9月1日-12月31日 西京(ママ), 東京, 熊本, 東京, 熊本, 上海。

- 明治29(1896)年1月1日-8月31日 上海, 漢口, 上海。

- 明治29年9月1日-明治30年(1897)年1月31日 漢口。

※但し, 明治29年10月18日-11月3日は欠, その時期に対応する記録は「梁胡二氏との応待始末」である。河南, 漢口。(2)を参照のこと。

- 明治30年2月1日-6月27日 上海, 熊本。

- 明治30年6月28日-10月17日 熊本, 東京。

- 明治30年10月18日-明治31(1898)年10月16日 台湾, 熊本, 上海, 芝罘, 膠州, 即墨, 上海, 漢口, 上海, 漢口, 上海, 漢口, 熊本。

※なお, 明治30年12月22日-28日のことは「青島紀行」にも書かれている。(2)を参照のこと。

- 明治31年10月17日-12月31日 東京。

- 明治32(1899)年1月1日-12月31日 熊本, 東京, 熊本, 上海, 蘇州, 上海, 漢口, 上海, 東京, 熊本, 上海, 湖南。

※そのうしろに, 「瀟湘泛槎日記」, 同年12月2日-翌年1月11日, を付す。

…以上は『日記』第2冊所収

- 明治33(1900)年1月1日-12月31日 湖南, 漢口, 上海, 芝罘, 天津, 芝罘, 上海, 漢口, 上海, 熊本, 上海, 漢口。

- 明治34(1901)年1月1日-12月31日 漢口, 上海, 熊本, 上海, 漢口, 上海。

※そのあとに, 「蘇州湖州杭州三府舟遊日誌」, 同年4月3日-9日, を付す。

※続いて, 「杭州遊日誌」, 同年5月18日-24日, を付す。

- 明治35(1902)年1月1日-12月31日 上海, 漢口, 大冶, 漢口, 上海, 熊本, 東京, 京都, 熊本。

- 明治36(1903)年1月1日-12月31日

熊本、上海、漢口、上海、芝罘、大東溝、安東県、九連城、韓国義州、鴨緑江、龍巖里、芝罘、青泥窪、旅順、芝罘、青泥、奉天、遼陽、牛莊、山海関、天津、北京、天津、芝罘、長崎、熊本、東京、京都、熊本、上海、熊本。

- 明治 37 (1904) 年 1 月 1 日－12 月 31 日「甲辰日誌」熊本、日奈久、東京、熊本、東京、熊本、東京、熊本、上海。

…以上は『日記』第 3 冊所収

- 明治 38 (1905) 年 1 月 1 日－12 月 31 日 上海、熊本、福岡、東京、熊本、上海。
- 明治 39 (1906) 年 1 月 1 日－12 月 31 日 上海、熊本、上海、熊本、東京、上海。
- 明治 40 (1907) 年 1 月 1 日－12 月 31 日 上海、漢口、上海、熊本、上海。

※但し、2 月 9 日－28 日は欠、3 月 1 日－11 日は一部簡単に記すのみ。

- 明治 41 (1908) 年 1 月 1 日－12 月 31 日 上海、漢口、上海、熊本、上海。
- 明治 42 (1909) 年 1 月 1 日－12 月 31 日
※但し、10 月 17 日－11 月 30 日は欠、その時期を除いて滞在した場所は、上海、大連・上海。

※うしろに、「北清遊記」同年 10 月 17 日－11 月 30 日、を付す。大連、旅順、奉天、撫順、營口、天津、北京、漢口、

…以上は『日記』第 4 冊所収

- 明治 43 (1910) 年 1 月 1 日－3 月 26 日 上海、熊本、東京。
- 明治 43 年 3 月 27 日－7 月 26 日「欧米鴻爪記」一、二、三 太平洋、布哇、米国、大西洋、英吉利、仏蘭西、伊太利、瑞西、独逸、露国、満州、日本。
- 明治 43 年 7 月 27 日－12 月 31 日 熊本、広島、上海、天津、北京、漢口、上海。
- 明治 44 (1911) 年 1 月 1 日－7 月 14 日 上海、熊本、蘇州、上海。
- 明治 44 年 7 月 15 日－12 月 31 日 熊本、東京、熊本、上海、漢口、上海。

…以上は『日記』第 5 冊所収

- 明治 45 (1912) 年 1 月 1 日－8 月 31 日 上

海、熊本。

- 明治 45 年 9 月 1 日－大正 2 (1913) 年 5 月 9 日 熊本、上海、杭州、熊本、朝鮮、天津、北京。
- 大正 2 年 5 月 10 日－12 月 31 日 北京、天津、済南、青島、済南、泰安、曲阜、兗州、南京、上海、南京、鎮江、上海、熊本。
- 大正 3 (1914) 年 1 月 1 日－8 月 31 日 熊本、上海、杭州、普陀、寧波、三都澳、羅源湾、福州、厦門、香港、広東、馬公、上海、熊本、東京、京都、大阪、熊本、鹿児島。
- 大正 3 年 9 月 1 日－大正 4 (1915) 年 8 月 25 日 上海、熊本、東京、熊本、上海、杭州、上海、熊本、東京。

…以上は『日記』第 6 冊所収

- 大正 4 年 8 月 26 日－大正 5 (1916) 年 12 月 31 日 日光、白河、仙台、松島、水戸、東京、上海、熊本、東京、京都、芦屋、東京、上海。
- 大正 6 (1917) 年 1 月 1 日－大正 7 (1918) 年 7 月 31 日 上海、杭州、東京、熊本、東京、上海、杭州、南京、東京、上海。
- 大正 7 年 8 月 1 日－大正 9 (1920) 年 8 月 31 日 上海、東京、上海、東京、上海。

…以上は『日記』第 7 冊所収

- 大正 9 年 9 月 1 日－大正 10 (1921) 年 8 月 16 日 上海、東京、熊本、東京。
- 大正 10 年 8 月 17 日－大正 11 (1922) 年 12 月 31 日 東京、上海、東京、上海。
- 大正 12 (1923) 年 1 月 1 日－15 日 上海。

…以上は『日記』第 8 冊所収

国会図書館所蔵分は次の通り。

- 明治 21 (1888) 年 4 月 17 日－5 月 9 日「江蘇小遊記」、鎮江、常州、蘇州。
- 明治 23 (1890) 年 3 月 3 日－7 月 31 日 漢口、上海、長崎、東京。
- 明治 28 (1895) 年 3 月 23 日－5 月 7 日「澎湖島従軍日記」。
- 明治 28 年 5 月 9 日－9 月 1 日「台湾従軍日記」。

これらは、いずれも小型の手帳に書かれたもので、その点で歴史研究所所蔵の日記とは趣を異にしている。急ぎ手帳に記したものを、その後定型の用紙に書き写す余裕が無かったということかも知れない。

(2) 報告書、論考

ここでは、宗方の報告書、論考を可能な限り時間の順に並べる。可能な限りとは、執筆時間を書いていない2、3の文章について、想定できる限りで並べてみたという意味である。ところで、報告書とは、海軍軍令部宛にナンバーをつけて提出した、いわば正規の報告書（といっても、定期的なものではなく、報告の形式が一定しているわけでもない）と、「臨時」あるいは「号外」と銘打った報告書のことである。報告の第1号は明治28(1895)年12月24日付であり、最後の第628号は大正12(1923)年1月12日付であるが、そのうち、国会図書館所蔵分は466篇（他に臨時報告が3篇、号外報告が57篇）、歴史研究所所蔵分は84篇（他に臨時報告が1篇）で、数からすると国会図書館分が圧倒的に多い。しかし、内容を抜きにして数だけで資料の価値は計れないので、少数とはいえ、歴史研究所分を無視するわけにはいかない。そこに所蔵されている原稿の種類としては、原件とカーボン紙による複写原稿と伝記作成のために原稿用紙に書き写したものの3種が入り混じっており、そのために、両所にだぶっている報告も少数ながらあるので、今は歴史研究所にのみある報告66篇（臨時報告1篇を含む）を並べることにした。

一方論考とは、その時々を情勢を論評したものや調査記録を含んでいるが、「報告」とは名乗っていない分、その提出先が海軍であるかどうか判然としない文章一般を指している。こうした性格の文章は国会図書館分にもあるにはあるが、そこには執筆が中華民国成立前後（明治末から大正にかけて）の文章が多いのに対し、歴史研究所分はそれよりも早い時期、明治20～30年代に書かれたものが多いのは、宗方の初期の中国認識を知る上で貴重である。

○「滬遊聞見録」、明治20(1887)年1月3日

～2月中旬。

※その後の一連の報告の原形をなすと考えられる。

○題名不明（中国の危機に対処して、早期に蜂起する必要を訴えている。漢文で書かれている。）

※内容から、初期のものと推定。

○「長江の波瀾」、明治24(1891)年6月17日。

○「教育私言」

○題名不明（運河について、北京から各省都までの距離について書いたもの）

※上記2篇は、日清貿易商会名のある用紙を使っており、明治24～5年と推定。

○「対支管見」、明治26(1893)年。

○「清国大勢の傾向」、明治26年(1893)年10月。

○「対清邇言」、明治28年(1895)年1月21日。

○題名不明（荒尾精死去を悼む文章）明治29(1896)年11月。

○「張之洞について」報告第16号、明治29(1896)年。

○「梁胡二氏応対始末」報告第17号、明治29年11月18日。

※同年10月17日～11月4日、漢口、河南、漢口と移動した際の行動を記している。

○「中国大勢の観測」、明治30(1897)年9月2日。

○「青島紀行」臨時報告3-2、明治31(1898)年1月3日。

※明治30年12月22日～28日の行動を記している。

○「清国人心の傾向」報告第26号、明治31年。

○「膠州湾事件の落着に関する総理衙門の上奏文摘要」報告第27号、明治31年3月1日。

○「英国の要求、津鎮鉄道、独逸の再要求、他」報告第28号、明治31年。

○「清国の防軍の区処」報告第29号、明治

- 31 年。
- 「皇嗣冊立」報告第 49 号, 明治 33 (1900) 年 2 月 5 日。
 - 「山東の義和団」報告第 56 号, 明治 33 年 4 月 2 日。
 - 「立嗣余響, 北京政府部内の露国党」報告第 57 号, 明治 33 年 4 月 1 日。
 - 「河南, 山西の鉞山開掘」報告第 58 号, 明治 33 年 4 月 2 日。
 - 「芦漢鉄道, 李秉衡」報告第 59 号, 明治 33 年 4 月 2 日。
 - 「義和団, 四川遡航の英艦, 他」報告第 60 号, 明治 33 年 4 月 14 日。
 - 「義和団事件」報告第 66 号, 明治 33 年 6 月 8 日。
 - 「四川遡航の英艦」報告第 67 号, 明治 33 年 7 月 17 日。
 - 「北清事件, 盛京省の不穩, 他」報告第 75 号, 明治 33 年 7 月 17 日。
 - 「劉坤一, 張之洞等の態度と南方の形勢, 日本出兵に対する南京官吏の誤解, 他」報告第 77 号, 明治 33 年 7 月 17 日。
 - 「清国将来の運命」報告第 100 号, 明治 34 (1901) 年。
 - 「兩宮回鑾の件」報告第 106 号, 明治 34 年 11 月 1 日。
 - 「清国の政況」報告第 107 号, 明治 34 年 11 月 23 日。
 - 「和局後の政治」報告第 129 号, 明治 35 (1902) 年 6 月 14 日。
 - 「清国盛京省大東溝の材木業」, 「鴨緑江沿岸聞見雜録」, 明治 36 (1903) 年 6 月 14 日。
※うしろに, 青泥窪, 遼陽州, 奉天府, 旅順口に関する報告を付す。
 - 「清国の政況各大官の系統, 皇帝皇太后の関係」報告第 183 号, 明治 39 (1906) 年 6 月。
 - 「袁世凱勢力の失墜」報告第 186 号, 明治 40 (1907) 年 1 月 23 日。
 - 「滿漢の勢力比較」報告第 189 号, 明治 40 年 3 月 5 日。
 - 「四鎮總統衙門」報告第 190 号, 明治 40 年 3 月 5 日。
 - 「袁世凱の勢力」報告第 210 号, 明治 40 年 9 月 3 日。
 - 「第二辰丸事件と広東人」報告第 282 号, 明治 41 (1908) 年 3 月 9 日。
 - 「第二辰丸事件の解決に対し自治会の運動」報告第 283 号, 明治 41 年 3 月 19 日。
 - 「辰丸事件の余響」報告第 284 号, 明治 41 年 3 月 27 日。
 - 「袁世凱の勢力と北京政況一斑」報告第 291 号, 明治 41 年 9 月。
 - 「皇帝崩御後の政局」報告第 297 号, 明治 41 年 11 月 15 日。
 - 「張之洞の逝去と北京の政局」報告第 316 号, 明治 42 (1909) 年 10 月 8 日。
 - 「資政院に対する卑見」報告第 323 号, 明治 43 (1910) 年 10 月。
 - 「資政院議事状況並に所感」報告第 324 号, 明治 43 年 10 月 8 日。
 - 「国会速開運動」報告第 342 号, 明治 43 年 12 月 22 日。
 - 「資政院における弾劾案の影響」報告第 343 号, 明治 43 年 12 月 26 日。
 - 「資政院の終局」報告第 344 号, 明治 44 (1911) 年 1 月 10 日。
 - 「清国の政況並に将来の変局」, 明治 44 年 1 月 30 日。
 - 「新政施行の困難」報告第 350 号, 明治 44 年 3 月 24 日。
 - 「憲法制定委員, 資政院副總裁の更迭」報告第 351 号, 明治 44 年 3 月 24 日。
 - 「鉄道国有に対する反動, 他」報告第 354 号, 明治 44 年 5 月 21 日。
 - 「清国現下の政況」報告第 356 号, 明治 44 年 6 月 29 日。
 - 「四川変乱の概況」報告第 357 号, 明治 44 年 9 月 25 日。
 - 表題なし, 明治 44 年 10 月。
 - 「清国変乱に対する卑見」報告第 358 号, 明治 44 年 11 月 12 日。
 - 「叛徒の仮政府」報告第 359 号, 明治 44 年 11 月 17 日。

- 「講和談判に就行」報告第 365 号，明治 44 年 12 月 15 日。
- 「革命党の内訌と匪乱」報告第 366 号，明治 44 年 12 月 15 日。
- 「新政府の組織と其発表期」報告第 367 号，明治 44 年 12 月 15 日。
- 「支那時局観」報告第 371 号，明治 45 (1912) 年 2 月 7 日。
- 「中国政治状況について」講演原稿，明治 45 年。
- 「孫逸仙との問答」報告第 385 号，明治 45 年 10 月 11 日。
- 「支那の政況」，大正 2 (1913) 年 5 月 25 日。
- 「支那の革命」講演原稿，大正 3 (1914) 年 2 月 21 日。
- 「欧州戦乱と日支両国の関係」報告第 416 号，大正 3 年 8 月 29 日。
- 「排日運動に対する所感」報告第 439 号，大正 4 (1915) 年 6 月 29 日。
- 「支那の動乱」報告 449 号，大正 5 (1916) 年 1 月 20 日。
- 「宣統復辟の運動」報告 470 号，大正 6 (1917) 年 4 月 4 日。
- 「宣統復辟に対する管見」報告第 472 号，大正 6 年 4 月 10 日。
- 「孫文との問答」報告第 478 号，大正 6 年 6 月 3 日。
- 「支那時局概観」報告 492 号，大正 7 (1918) 年 3 月 30 日。
- 「政局の紛糾と復辟の謠言」報告第 501 号，大正 7 年 8 月 29 日。
- 「総統改選と時局の関係」報告第 502 号，大正 7 年 9 月 16 日。
- 「南北妥協の難関」報告第 507 号，大正 7 年 11 月 11 日。
- 「排日運動の趨勢」報告第 510 号，大正 8 (1919) 年 4 月 25 日。
- 「排日運動に対する所感」報告第 529 号，大正 8 年 9 月 5 日。
- 「支那人心の悪化」報告第 539 号，大正 8 年 11 月 25 日。

- 「支那各派の連絡系統と現下の形勢」報告第 574 号，大正 9 (1920) 年 10 月 27 日。
 - 「政局大観」報告第 579 号，大正 9 年 12 月 18 日。
 - 「支那政局解剖略説」報告第 583 号，大正 10 (1921) 年 3 月 11 日。
 - 「支那政局概観」報告 590 号，大正 10 年 9 月 22 日。
 - 「支那政局の大勢」報告第 625 号，大正 11 (1922) 年 11 月 24 日。
- 他に，未確認の文章が数篇ある。

(3) その他

日記と紀行文，報告書と論考については，すでに (1) と (2) で詳しく見てきた通りだが，それ以外の資料については未確認のものが多く，今は確認できた限りでコメントし，並べていく。

a. 宗方の手紙

ここに並べる以外にも友人宛の手紙がいくつかあるのは，総じて大正期が多い。他に，海軍あるいは吉田大佐宛の報告が手紙の形で数通残されている。

- 佐々，牧宛，明治 20 (1887) 年 12 月。
- 熊谷直亮宛「狂夫之言」，明治 21 (1888) 年 10 月。
- 白岩龍平宛，明治 24 年頃。
- 海軍軍令部宛（孫の来日について），明治 45 (1912) 年 10 月 11 日。
- 宛先不明（広東独立について），大正 5 (1916) 年 4 月 8 日。
- 吉田大人宛（排日運動の状況，他），大正 8 (1919) 年 7 月 12 日。

b. 宗方宛手紙

国会図書館に多数あるのに比べて少ししかないが，漢口楽善堂時期の同志が明治 20 年代に書いた手紙は，貴重な証言となろう。

- 広岡安太，明治 20 (1887) 年春。
- 荒尾精，明治 21 (1888) 年 6 月。
- 浦敬一，明治 22 (1889) 年 1 月 4 日。
- 石川伍一，□□年 9 月 12 日。

○ 佐々友房，明治 29 (1896) 年 1 月 28 日。

c. 宗方の詩稿

明治 20 年代から大正初年までに読んだ漢詩を，年代ごとに 1～11 までに分けて一巻に綴じてある。日記と対照しながらその時々感慨を知る際に貴重である。

d. 伝記作成のための諸資料

弟子の波多博が始めた宗方の伝記編集作業が，かなりのところまで進行したことをうかがわせるに足るような多量の原稿類がある。そのうち，宗方の日記，紀行文，報告文，論考の一部を書き写したものは，原件が見当たらないものについてはとくに貴重であり，それに該当するものは (1) と (2) に入れている。

- 各界人士が書いた宗方回想文。
- 熊本での青年期から晩年までの写真。
- 宗方および熊本の人士の活躍を回顧した，九州日日新聞記事の切り抜き。発行年未確認。

2. 明治 21 年の日記

今後宗方資料の丹念に分析するにあたって，まずはその 1 篇 1 篇の内容を読み解く必要があるのは言うまでもないことである。幸い，宗方の書く字はくずした字が少ないのでその分読みやすいのであるが，それでも所々は判読不能の字が出てくる。そこで筆者がどの程度に判読できているか，試みに歴史研究所に保存されている多量の資料の中から，日記のごく一部，原件として今読むことのできる一番古い時期である明治 21 年 5 月 19 日からの部分を書きおこして紹介することにする。

すでに 1 で触れたことだが，その部分は明治 21 年 5 月 19 日から 12 月 31 日までが一まとまりになっていて，この一まとまりに宗方本人がのちに付けたと覚しき表紙には，毛筆で「明治二十一年五月十九日起 往返日記 上海漢口熊本天津北京間の往返日誌」と書かれている。但しここでは，7 月 1 日に長崎経由熊本に帰着して 8 月 20 日に再び長崎経由で上海にもどるまでの約 50 日間を

割愛した。限られた紙数ゆえ，中国での動きだけでも見ておこうと考えたためである。

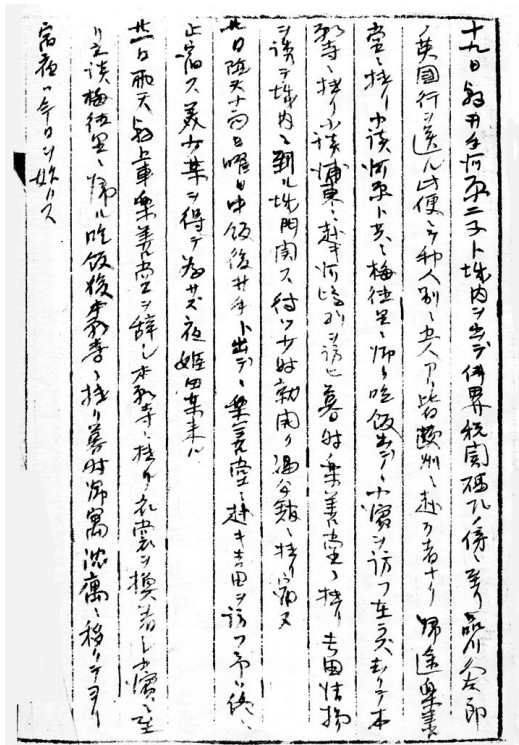
この日記を読んでいやおうなく気づかされるのは，上海で連日たくさんの人間と会っていることである。その大部分は同郷熊本出身者であるがそうではない者もあり，楽善堂支店に行ったら店主の岸田吟香と頻繁に交流している様子も見てとれる。浦敬一の手紙に促されて漢口に行くと，当地の楽善堂支店に起居している荒尾精，浦敬一等と何やら相談しており，浦たち 3 人が任務を帯びて新疆に旅立つのを見送っている。日本から上海にもどると，岸田と北京行きについて相談し，天津経由で北京に着くと，ここでも大勢の日本人に会うと共に，楽善堂支店を開くために奔走してついに開店にこぎつけている。半年程度の記録を読むだけでは何ほどのこともいえないけれども，中国各地でどんな日本人と往来しているかを知るのは興味のあることであり，特にこの年のこととしては，各地で荒尾や岸田と連絡をつけながら楽善堂に関わる動きを示しているのは，今後この件の事実関係を究める上で誠に有効な情報を提供するものといえるであろう。

なお，書きおこすにあたっては，原文の片仮名を平仮名に，漢字の旧体字を新体字に改めると共に，適宜句読点を加えた他，便宜上 2 箇所「」部分を加えている。また，判読不能な文字は□で示した。さらに，漢字や仮名の使い方に間違いがあると思われる箇所もそのままにした。

「五月」

十九日 朝，井手，河原二子と城内を出で仏界税関碼頭の傍に至り，品川久太郎の英国行を送る。此便にて邦人別に五人あり。皆欧州に赴く者なり。帰途楽善堂に抵り小談。河原と共に梅德里に帰り吃飯。出でて小浜を訪う，在らず。去りて本願寺に抵り小談。浦東に赴き河嶋□を訪い，暮時楽善堂に抵り吉田清揚を誘て城内に到る。城門関す。待つ少時，就開く。馮公館に抵り宿す。

二十日 陰天小雨。日曜日。中飯後井手と出でて楽善堂に赴き吉田を訪う。予は終に止宿す。美少某を得て為さず。夜姫田某来る。



宗方日記、明治21年5月19日からの1ページ分

二十一日 雨天。朝上車樂善堂を辞し、本願寺に抵り衣裳を換着し、小浜に至り立談、梅德里に帰る。吃飯後本願寺に抵り、暮時帰寓。沈寓に移りてより宿夜は今日を始とす。

二十二日 快晴。朝小浜為五郎を訪う。邦山子在り。中飯後小浜と出でて郵局に抵り、浦東に遊び、中山、河嶋等を訪ひ酒を飲み、四時帰寓す。

二十三日 快晴。終日在家。江南製造局決算報告を謄写す。

二十四日 快晴。午前井手、河原二子来訪。河原氏は明日を以て漢口に赴くと云。古館要造来り、近日芝罘道台の子某来滬の筈なるを以て、之を一旗亭に招餐せんとす、願くば足下通弁の勞を取らん事をと。予之を絶つ。下午河原、井手と共に寓を出で、途中二子と別れ、予は本願寺に抵り、奥村を誘て城内に抵り、井手等の帰るを待ち南門壁上に登り遊覧久之帰。馮公館河原の出発

は、船の都合により明後日に延びたり。漢口浦敬一、前田寅二子に与うる書状を托す。

二十五日 好晴。小午城内より帰寓。夜月に歩して虹口に至り小浜を訪う、在らず。本願寺に抵り奥邑生を訪ひ小談、帰寓す。

二十六日 好天。終日在家。晚餐後出でて樂善堂に抵る。河原子将に行んとす。井手、小浜、吉田、緒方、片山諸子と送りて萃利輪船に抵り、九時諸子と本願寺に帰る焉。

二十七日 陰晴無常。朝本願寺より帰り長江紀行を作る。晡井手、緒方、片山、吉田、小浜諸子来る。井手浦東の運動会にて手を折りしと云う。小談。諸子と出で、途中予は小浜と共に牧野大尉の処に抵る。招餐に應ずるなり。邦山小佐亦来る。飲嘆夜更に至り、予は小浜の処に宿す。

二十八日 好晴。朝小浜より帰り、紀行を作る。下午出去本願寺に抵り、晡帰寓す。夜教師と古今人物を論ず。予之に謂て曰く、貴国人何ぞ歴史を読まざる。曰く、經書を上と為す、歴史の如きは益き少し読まざるも可なり。予曰く、文天祥、岳飛忠臣なる哉。曰く、宋時の忠臣にして我朝の忠臣に非ず。予曰く、忠臣たるは一なり、心を正に存し涯分を尽す、忠臣なり。予戯れに知らざる為して之に問て曰く、君等著る所の衣服は明朝の製か。曰く、清朝也。然らば満洲の衣冠か。曰く、然り。曰、是即漢人の北狄と為す者の衣也と。彼苦笑す。彼又曰、諺曰、黄水一清出聖人と。数年前黄水一清、国人皆曰く、必ず聖人有りて出んと。予笑曰、現黄河決潰河南北之十余郡波浪洪波の中に漂没し、餓浮道に載ち号叫天に聞く、是尚聖人を出すの兆か。彼又默然、曰く、水清出聖の談信ず可からずと為す。

二十九日 好天。終日在家、紀行を作る。下午北御門松二郎来る。昨日の薩摩丸より来滬し、漢口樂善堂に赴くと云う。小浜、吉田亦来る。吉田は今夕より商用の為北京に赴くと云う。酒を酌んで共に飲む。晡時出去、東和洋行に抵り、去りて樂善堂書房に抵り吉田の行を送る。頗る酔を極む。十時

小浜等は北御門の寓東和洋行に抵り、予は終に宿す。

三十日 好天。朝東和洋行より帰り、長江紀行を了り邦山を訪い、小浜と共に東和に抵り北御門松二を訪い小談、共に出でて岸田吟香を訪い小談、去りて城内に赴き井手三郎を叩き、晡時東和洋行に帰り酒を飲み十時に至る。秋山純、呉某等亦来る。外に一書生某、北門生と同船南京に抵り内地を旅行せんと云う。予其の語言通ぜず異装を以て独り内地に入るの無益たるを説き、反覆之に諭し、同人をして鎮江に抵り決する所あらしむ。二人を送りて怡和の福和号に抵る。北門子台中寒冷船艙以外に一文を余さず。故に予知人に就き蠅頭を借りて之に贈る。十一時半小浜の処に至り宿す。

三十一日 好天。小午小浜氏を出で本願寺に抵り、熊谷直亮、古川、浅山知定、内藤儀十郎諸氏に与うるの書状を出す。其前、朝邦山子に抵る。予が帰国の旅費二十円及び日本衣等を餞せらる。暮時帰寓。夜去りて小浜を訪う、在らず。奥村を訪う、又在らず。

六月一日 好天。

午前出去小浜の処に至り小談。去りて鈴木に至り楓橋の写真を取り、小浜の処に帰り、下午牧、小浜二子と邦山子の寧波に帰るを送り、太古碼頭の宜昌輪船に至る。北海道の官吏赤壁某も同船せり。四時開船一別、去て城内に抵り井手等を訪い、終に宿す。

二日 陰天。下午雨。午前小浜亦来る。予は止りて中飯し、下午城を出で小浜に抵り小談。降雨を以て上車、梅德里に帰る。

三日 好天。日曜日。下午出去小浜に抵る、在らず。奥邑を訪う。樋口忠一も亦来る。虹口西花路の当舗失火、行て見る。帰途小浜の処に立寄り洗澡、帰寓す。夜胃痛。

四日 好天。運河紀行を作る。夜出去樂善堂に抵り秋山を訪う、在らず。小浜を訪う、又在らず。終に本願寺に抵り宿す。

五日 好天。朝本願寺より帰り、運河紀行を

作りて之を終わり、下午携えて牧氏に抵り、之を寧波邦山氏に転致せんことを托し、隣邦兵備略を借り小談。去りて本願寺に到る。奥邑在らず。帰途又た小浜に抵り小談、帰寓。夜出去樂善堂に抵り秋山を訪う、在らず。去りて城内に抵り井手等を訪い、終に宿す。

六日 陰天。下午井手、緒方二子と出でて、小浜を訪い、共に出でて本願寺に到り、晡時井手、緒方二子と予の寓に帰り晚餐す。初更諸子帰去。此日安樂平次の書状寧波より到了。

七日 細雨霖々。下午出去小浜氏に至る。漢口の芳原某来る。今日安慶号より来着せしと云う。浦敬一の書状到る。事業上予に会して計画すべき事有れば、急速来漢を促す。蓋し浦、北御門等本日十四日を以て北漢に遊ばんとす。故に其未だ漢口を發せざる前に予の来漢を望むに切なるを以て、明日の安慶号にて出発に決す。蓋し我本月十五日を以て帰国に決せしに、今又た西行せざるを得ざるの場合と為り、事頗る紛雜せり。大屋半一の書亦到る。同人は藤嶋と共に近日北方に向いたりと云う。小浜の処にて吃飯、上車樂善堂に抵り芳原を訪い、書坊に赴き秋山を叩き小談。去りて同芳茶館に赴き吃茶、上車本願寺に到り宿す。

八日 陰晴無常。朝籃子を購ひ小浜に抵り小談。小午帰寓。夕城内より井手、片山、緒方等と本願寺に抵り、八時予は諸子に分れ、太古碼頭の安慶輪船に抵り投ず。

九日 六時呉淞口を出ず。大霧江を蔽う。夜十時鎮江着。

十日 朝南京を過ぐ。

十一日 江上。

十二日 午前九時漢口に達し上岸。樂善堂に抵る、下午荒尾子に会す。予に囑するに直隸、山東、山西、遼東の経略を以てす。予問難協議、時を移し清曆七月下旬天津に赴くことに決す。浦、北御門三子来る。十七日伊犁に赴く事に付き諸事協議を遂げたり。下午荒尾、浦、北御門、河原諸子と共に撮

影す。

十三日 微雨。

十四日 前日写真の不出来を以て下午又た諸子と赴き再写す。此日北部四省経略の考案を作る。

十五日 好天。夜浦□は領事館より離盃に招かれ赴けり。大屋半一郎に甘肅蘭州に送るの書状を作る。北遊の諸子に托するなり。

十六日

十七日 三子の北征を送るの詩一章を作る。夜送別の宴を開き痛飲快談絶世の快を極め、再会の復た期す能わざるを以て座客為に悲喜。

十八日 好天。下午浦敬一、北御門松二郎、河原角の三子を漢水に送る。風瀟々たらず水寒からずと雖も、殆んど人をして易水の感に堪えざらしむ。晡時船頭別を序して帰る。嗟々、再会復た期す可からざる也。

十九日 朝吉嶋徳三及び天津太倉組の人某来漢、楽善堂に投宿す。夜荒尾子と大智門を出で月に歩して城外に散歩し、十一時帰る。

二十日 夜前田、井深二子と江干に散歩し、跑馬場に至り月を賞す。

二十一日 好天。終日在家。

二十二日 微量。今夕を以て将に上海に帰らんとす。夜酒を飲み井深、前田諸子に托して荷物を船上に送り、予は荒尾子と共に町田領事を我領事館に訪う。洋酒を饗せらる。九時元和輪船に搭ず。荒尾、前田、井深三子送来船上諸事を暢談して別る。十時半開船。此便吉嶋徳三及び天津太倉洋行の某も同船す。彼等は上等に座せり。夜雨。

二十三日 早天黄州府を過ぎ、十時九江に達す。此日晴雨無常。

二十四日 雨。蕪湖、南京を過ぎ、晡時鎮江府に達す。圖山館の前を過ぎる。頃暮色初て冥合す。曾文正の家書一冊を読了る。

二十五日 雨霏々。十一時船上海の怡和碼頭に達す。挑夫を雇て上岸、本願寺に抵る。全身浴するが如し。小浜君来訪。邦山氏の田代屋に在るを聞き行て訪う。談話少時にして帰る。牧氏を訪う。晚餐を饗せらる。

夜小浜氏に宿す。

二十六日 朝楽善堂に抵り岸田吟香を訪い、漢口より托されたる洋銀二百元を面交し、天津に支店新開云々の事を商量し、約を定て帰る。同薬房にて小浜氏に会し、共に城内に赴き、井手等を訪う。晡時緒方、片山二子と出城、本願寺に抵り、城内に抵り宿す。

二十七日 朝城内より帰り小浜氏に抵る。七里某在り、共に浦東に赴き河嶋浪速等を訪い、三更渡江小浜氏に帰り宿す。此日漢口荒尾、前田、井深諸子に書状を送る。岸田と商量の事及び荒問奇答を書送す。

二十八日 雨。朝邦山氏を叩く。昨夕寧波に赴けりと云う。又た小浜氏に帰り牧氏を訪う。晌午沈少坪と共に同人の寓に抵り小談、吃飯。明日帰国を以て別を告ぐ、茶資二元を給す。吃飯後小浜氏に帰り、本願寺より荷物を移す。井手、奥村、緒方、片山諸子亦来る。洗澡弁髪を解き日本衣に換え、諸子と城内に抵る。酒を飲み詩を賦す。夜井手発病。

二十九日 朝諸子と出城。予は楽善堂に抵り秋山純を訪い辞別す。計らず小山松溪に会す。昨年の十二月杭州にて面会せし人也。薬房に至り岸田吟香を訪い辞別す。領事館に抵り佐藤伝吉及び山田広三を訪い辞別。牧氏に到り中餐す。又た日本酒数瓶を饒せらる。同氏は陸軍大尉を以て此に駐する者也。一時行李を送りて東京丸に抵る。牧大尉、二口書記、山田、井手、小浜、河嶋浪速、七里某、重野紹一郎、秋山純、奥村金、緒方二三、片山敏彦、石井、為成、外二三子来送す。此日北川宅にて荒賀直順子の来滬し漢口に赴きしを聞き、書を作り井手の漢口行に托して之を転致す。蓋し荒賀氏の来滬せし頃は予の漢口を発せし時にて、途中揚子江上にて行違になりたるなり。二時半開船上海を辞し去る。小倉錫太（福州より帰る者）外二三の邦人と同船す。

六月三十日 是日風穩か波海面平滑也。晡時西北遥に朝鮮の濟州島を望む。相距る十里

余（舟人二十里余と云う）。

（以下、7～8月の日本、主に熊本滞在中の日記は割愛）

「八月」

二十日 早起、海水初て渾る、大陸に近きを知る。波涛亦随て穩かに塩水を行くが如し。小午寧波の諸島を望む。十時半頃船初て呉淞口に入る。一時上海に着す。一同東和洋行に搭ず。奥村金、緒方二三訪来る。夜佐野と邦山子を田代屋に訪う、在らず。去て公園に抵り西人奏する所の樂を聞き一同客店に帰る。是日漢口に着滬を報じ、急に金十円を送らん事を乞う。

二十一日 朝樂善堂に抵り岸田吟香翁を訪い、北京行の事を照料し、午時辞帰す。下午山田、松田、佐野、岡村諸子と邦山子を訪う、在り焉。小談帰寓。夜独り邦山氏を訪い諸事を談じて帰る。邦山に抵るの途次山田珠一、岡村正夫と片山敏彦の病を訪う。

二十二日 朝一行と城内に入り、馮公館、湖心亭、城隍廟等を巡覽し、帰途同芳茶店に山田、岡村、佐野、松田諸子と投ず。緒方、永原等も亦後れ到る。晡時小浜為五郎来る。夜山田、岡村、松田、佐野と小浜を訪う。小談出で本願寺に抵る、在らず。緒方□を訪い小談、帰寓す。

二十三日 小午七里某來訪。曰く、近に掘井工夫を率て台湾に航し、劉銘伝の処に到ると。予其行を壮なりとす。中食後沈文藻を梅德里に訪う。小談、帰寓。佐野と出でて牧五郎子を訪う、小談。去て本願寺に抵り松江賢哲を訪い談。移時帰。沈文藻來訪、共に出で邦山子を訪う。同子明日より支那語を学ぶを以て之を紹介する也。且つ邦山氏に山鹿団扇の見本を送り、寧波に販路を開かん事を托す。夜家信一封及び鎮江伊達姓に寄するの信一封を認む。伊達には鎮江に書生の寄宿所を覓め來らん事を托する也。

二十四日 未審。此日午後諸子と共に申園に遊び、帰途日本墓所を見て帰る。

二十五日 朝東和洋行を出で岡村、松田、佐野、山田四子と天潼路古賀清一方に移転す。一ヶ月の食料を五円と定む。

二十六日 是日山田、岡村、松田、緒方諸子行て徐家匯に遊ぶ。予行くことを得ず。是日村瀬藍水來訪。画人、本年四月蘇州の遊次知る所の人也。本夕より南京に赴くと云う。

二十七日 未審。

二十八日 夜緒方、小浜、永原、糸川、鐘江、奥村諸子を訪い、会食す。

二十九日 是夜山田珠一、松田満雄、緒方二三、三子を怡和洋行の元和輪船に送る。山、松二子は漢口に赴き、緒方子は鎮江に赴く者なり。十一時三子に別を告て帰る。荒尾、井深、前田、荒賀、井手諸々書状を送る。山田□の漢口に托する也。

三十日 下午小浜来る。予は上車岸田翁を訪い小談。帰途沈少坪を訪い帰寓。佐野と邦山氏に抵り小談去て浦東に遊ぶ。岡村正夫、永原純二、鐘ヶ江源、小浜為等の諸子に在り、酒を出す。三更岡、小、佐三子と帰る。

三十一日 下午本願寺に抵り松江賢哲を訪い、熊本より托されたる新聞題字の事を依托す。佐々、浅山両氏及び古川、熊谷、津野、脇山、財津志満記諸君に与うる書状三封と家大人及び矢嶋篤政に与うる書状一封を、岡村正夫子の帰国に托す。同子は明早の西京丸にて帰国する者也。夜十時佐野、永原、奥村、鐘江、小浜諸子と送りて、船に到る。是日漢口荒賀子の書到る。来月より陸路四川を経て天津に我支店を援くと云う。

九月部

初一日 朝大雨。小午牧五郎氏を訪い鎮江より蘇州迄の路引を贈る。下午牧子來り北京に在る青山、天津の予氏に与ふる書状を托す。本願寺に抵り荷物を拿り來り行李を整理す。下午緒方二三子鎮江より歸來、彼地留学の都合□布からずと云う。匯時樂善堂より漢口荒尾氏の書状を送り來る。夜岸田翁を訪う。荒尾子より送致の金十円を受取

る。帰りて牧氏を訪う、在らず。本夜より南京に赴けりと云う。

初二日 下午岸田を訪い北京行の事を照量し議し了て帰る。夜沈文藻を訪い、今回同行の永原、糸川、鐘ヶ江三子及び緒方、片山二子を同人宅に同居し語学を修めん事を商量す。月謝食料共一ヶ月四円五十銭と定む。帰りて小浜を訪い小談。此日熊本佐々先生及び岡本源次、両氏に与うるの書状を認む。山田珠一の帰国に托する也。外に漢口荒尾精氏に寄する第二号信を認む。熊本の景況及び北京行の事と佐々、津田両人の事を記報す。又た別に山田珠一に一封を遺す。

初三日 予、佐野成章と本日をも以て将に北上せんとす。十一時沈文藻宅に抵り、転じて岸田翁を訪う。山内崑氏只今漢口より来着して在焉。岸田洋饌を饗せらる。外に山内と同道長谷川某も来れり。此両氏は上海に在りて岸田の本店を叩くと云う。下午山内と帰寓、沈少坪来る。佐野氏に托して船票を買う。室付きにて煙台に抵る、十二円也。晡時佐野氏と邦山淳子を訪う。小浜為五郎、安楽平治二氏在焉。邦山氏晚餐を饗せらる。談話、移時帰途本願寺に抵り松江賢哲を訪て辞別し、直に去て緒方氏等を叩く。酒肴を具して以て待つ。一盃を傾け辞て寓所に帰り、行李を整え運搬を佐野氏に托し、予は去て樂善堂に抵り岸田翁を訪う。翁、塩田公使、中嶋大際官等に与うるの転書を托す。且つ茶食を饗せらる。十時樂善堂を辞し、山内、長谷川二子と太古碼頭の重慶号に抵る。邦山淳、小浜為、安楽平、緒方二、片山敏、永原純、糸川直、鐘ヶ江源、奥村金、中村雄諸子来り送らる。邦山少佐別に臨て曰く、同氏寧波の支店を我党の手に引譲らんと云う。予大に之を喜ぶ。十一時送來の諸君去る。

四日 午前八時開船。海波平漫。

五日 風波平穩。

六日 早起、船已に成山角を過ぐ。浜海の諸山鋸齒の如く怒濤の如く、向沙一帶山脚を装い水光色と相映掩し、風趣佳絶人をして

快呼せしむ。

九日 此朝、日本船敦賀丸仁川より入港す。予輩之に搭じて将に天津に航せんとし、行李を整頓す。中飯後林領事を訪い辞行す。偶々世良田海軍少佐（亮）、林海軍大尉、某海軍大佐、敦賀丸事務長在焉。世良田、林等の諸子は、帝国軍艦に乗込み朝鮮に抵り今日帰來せし者也。二時半船に投ず。白須、木脇等の諸氏送り来る。予、佐野成章、林昌雄、上原某、世良田諸氏と同船せり。三時開船、風波平滑、左方芝罘島絶壁如削風色絶佳、始皇登之望海之处有碑、僅かに基址を存すと云う。日暮登州沖を過ぐ。渤海の群島螺浮星羅、船画図の裡を行く。夜に入りて満天如拭星斗爛然、顧うに、予昨年前月一葉の扁舟此の波を渡る者兩度、而して今日又た飛輪此を過ぐ。我遊実の方無き者。

十日 好晴。九時船大沽沖に達す。芝罘より此に至る十八時間を費せり。凡そ輪船南來天津に入る者、必ず此に來りて錨泊し、船貨を別船に移し船脚を輕め進潮を待て、徐に大沽口に入るを常とす。若し潮時の都合或は天候の如何によりては、二三昼夜も空く此に錨泊する事ありと云う。下午六時潮に乗じて船を開く。錨泊時間凡そ十時間許、招商局の海定も同時に入口す。我船の未だ大沽沖を發せざる時、天津税関の官吏來り船荷を搜索す。予、樂善堂の藥箱三個と伝雲竜の書箱一個を携う。税金未納を以て共に税吏の拿し去る所と為る。夜白河に泊す。

十一日 大沽より此に至る、兩岸平茫一山を見ず。海面を□ぐ、僅かに四ヒートと云う。民屋は凡て泥造にして矮小見るに堪えず。白河屈折最も多く、俗に七十二湾有りと云う。我船河岸に擱着して動かざる者前後三回、若し新入の船舶は必ず大沽に在りて導水者を雇う。大沽、天津の往復八十両と云う。午前十時船天津に着す。佐野と三井物産会社支店に投宿す。佐々木祐司氏に面す。病を以て牀に在り。中餐後我領事館に至り

書記横田三郎を訪う。去年北京にて面せし人也。荒賀直順及び家弟光彦の書状来着し居たり。四時横田を辞して帰寓。佐野と徳丸策三を叩き小談、帰寓。晚餐後佐野と陸軍大尉予鉄雄氏を訪い小談、去りて武斉号に抵り奥村某及小笠原揆一に面し、隔壁の積慶堂に抵り藤田捨三に面し、岸田の書状を交附し小談、帰寓。予と佐野は杏田熊ノ助氏と同房に宿す。

十二日 朝佐野と領事館に抵り横田に面す。晚餐の案内あり、小談。去りて上原某を訪い佐野と津海関に抵る、一昨日の薬箱を受取らんが為也。官吏苦言百出甚だ之に困す。帰途積慶堂藤田捨三を訪い代理受取主たらん事を乞い、帰寓。中餐後佐野氏独り海関に抵り薬箱を受取らんとす。酷吏税金の多きを覓めて渡さず、空く帰来。

十三日 朝佐野、藤田両氏と徳丸策三を訪い、中餐し二時出でて、天津海関に抵り荷物受取の事を商量す。関吏曰く、税関規則に触るるを以て罰金十五兩と税金十五円通共三十兩を要す。積慶堂に抵り金二十六弗を借り、都合四十五弗五十六錢を以て税関に抵り手数を終る。積慶堂に抵り小談、帰寓。夜公館に抵り横田三郎を訪う、在らず。帰途之に逢う。

十四日 晌午藤田、佐野両子と鈔関に抵り、数々に照し荷物を受取て帰る。下午横田三郎を訪う。止て晚餐し共に出て徳丸策三を叩き小談、帰寓。

十五日 朝佐野氏俄かに持論を変じ、我事業の前途を危み、北京行の念を絶つ。予喋々之が弁を為す可からず。一夕忽ち志の向う所を変ず、我其丈夫の所為たるや否やを知らざる也。予明日を以て将に進京せんとし行李を整頓す。晡時領事館に抵り横田生を訪う。徳丸策三亦来る。暮時帰寓。夜世良田少佐を訪い日清の国事を暢談す。豫鉄雄氏亦在焉。談、移時去て領事館に抵り横田、沼二子を訪い深更別を告て帰る。時十二時也。

十六日 午前二時雇う所の馬車期の如く来る。

起来佐野成章と之に投じ、三井洋行を發す時、天未明星斗横空、天津城下を経て白河の岸に沿い楊村に抵り午餐す。蔡村河西務を経、安平に抵り宿す。従出津米飯なし、餅子を食す。

十七日 未明店を出て張家湾を経、于家園に抵り小休。五時広渠門を入り崇文門を進み六条胡同の公館に抵る。暮陸軍中尉河原彦太郎子に面し吃飯す。夜佐野と山口外三を孝順胡同の同仁医院に叩く。通州一別以来の邂逅也。深更帰。

十八日 朝馬車に投じて佐野と山口外三を訪う。再び一車を雇い三人同乗交民巷の我公使府に抵り中嶋雄を訪い、岸田の書状及び贈物を面交し小談。山口子と上車、正陽門を出て瑠璃廠に抵り、吉田清揚を樂善堂書房を訪う。郷試售書の為に茲に在る者也。小談、共に車に投じ公使府に來り、宮嶋大人、佐野直喜二子を誘い六条胡同に帰る。暮時山口、宮嶋二氏去る。吉田清揚留宿す。

十九日 吉田清揚と出で公使府に抵り中嶋、宮嶋両氏を訪い、清人喬姓を館内に叩き同人の姓名を借りて今度我藥舗を開かん事を照量す。外国貿易の地に非ざればなり。喬姓諾す。吉田と共に前門外に抵り空屋を索求す。僅かに二個を得たり。瑠璃廠の樂善堂に抵り小談。晡時辭、帰途山口外三を同仁院に訪い小談、帰。是日石川伍一の書状漢口より来る、四川に赴くを報ず。

二十日 下午佐野と上車公使府に抵り宮嶋を訪い、去て中嶋雄を叩き談、時を移て帰る途山口外三を訪い小談、帰寓。夜山口氏來訪、三更辭歸。此夜陰曆中秋、微雨。

二十一日 下午出で公使館に抵り喬姓を訪い、共に出で瑠璃廠に抵り吉田を訪い、同く頭条胡同に抵り前日得たる所の家を見る。吉田と予は公使館を経て六条に帰る。吉田留宿す。

二十二日 早朝佐野直喜馬車天津に帰る。中餐後吉田と出で公館に抵り、喬姓を誘い先日の家を見る。圧租四百五十兩、一月房錢三兩五錢と云う。一覽了りて瑠璃廠に抵り

小談、宮崎大人、熊坂某到る。共に辞て公使館に帰り、宮嶋氏に晚餐し、夜に入りて雨、終に宿す。

二十三日 朝六条に帰る。下午山口外三子来る。晡時吉田清揚亦到る。夜共に酒飯す。山口、吉田両氏留宿す。是日より彭姓の清人を雇う。

二十四日 早吉田と公使館宮嶋氏に抵る。山口外三亦来る。宮嶋氏に飯す。下午山口、吉田二氏と前門外に抵り演戲を見る。晡時吉田と別れ山口と帰る。夜河原彦太郎を叩き談ず。

二十五日 早微雨。浜勉孝、小浜、安楽二姓、及永原等々上海に寄するの書を読む。吉嶋徳三の帰申に托するなり。昨日岸田吟香及び漢口の前田、井手、中野三子に寄するの書を出す。終日在家。

二十六日 朝瑠璃廠に抵る。中餐後進城、吉嶋徳三を米国弁館に訪い、上海の浜、小浜、安楽、永原□、隠岐諸子に与うるの書を托す。宮嶋を訪い、晡時帰寓。夜雨。

二十七日 雨天。是日将に瑠璃廠の樂善堂に移寓せんとす。下午吉田と共に車に投じ前門外の瑠璃廠に移転す。

二十八日 下午出去、出で公使館に抵り宮嶋を訪い、去て山口外三を叩き酒を飲み我党事業上の事を詳談痛話し、終に宿す。

二十九日 小午山口氏を辞て、瑠璃廠に帰る。
三十日

十月

一日 好。下午出去、公使館に抵り宮嶋氏を叩き、荒尾精氏に与うるの書状を認め之を托す。前田氏の来京を止むる為なり。去て山口氏を訪い小談。共に公館に抵り、日暮帰寓。

二日 好。是日瑠璃廠の書舗を閉す。順天郷試終りを告げたればなり。吉田氏と残書を検査し之を箱中に装す。

三日 好。書舗開店以来の帳簿を点検す。上海より来る所の蔡某無礼殊に甚し。予怒り殆ど禁ずる能わず。予の商人たるを以て勉

て之を忍べり。

四日 好天。是日早荷物を収齊し吉田清氏と共に頭条胡同に搬居す。此日より北京人王某及び従前より雇う所の汪緝南を雇て夥計と為し、彭某を厨子と為す。

五日 下午楊氏と公使府に抵り、中嶋氏に就き租銀の足らざる者□からんと欲す。能わずして帰る。

六日 午時楊氏と進城、吉嶋徳三を訪う。林某座に在り。此二子骨董買入を以て茲に来る者、明後々日を以て帰申すと云う。因て林子に就き銀二百五十弗をかるを約し、氏が上海に帰りて樂善堂より受取呉れんことを請えり。晡時帰寓。

七日 終日在家。

八日 好天。朝吉田氏と進城、吉嶋徳三を叩き上海奥村生に寄するの書を托す。生が本願寺を出するに付き、新報社通信一件を告ぐる也。又た芝罘佐野直喜に一封を寄す。外に山田珠一、古川権九郎に熊本に寄するの書を読む。山田には新報の送致を頼み、古川には弟光彦帰国の一件を依頼せり。別に漢口荒尾精氏に一封を寄す。井手三郎、及び緒方二三、片山敏彦二子も同封にて一書を寄せたり。此日租銀の不足二百五十弗を林忠正氏より借れり。公館に抵り宮嶋及び中嶋氏を叩き小談、帰寓。此日中嶋氏に中餐す。清国官吏李某に会せり。金陵の名家也と云う。紫溟新報て来着せり。岸田吟香翁に一書を呈せり。夜更通信を認め山田の信中に封入、紫溟新報に送る。

九日 終天。終日在家。山口外三来訪。

十日 好天。朝出でて林忠正氏を外国客棧に訪う、小談。出で公使館に抵り、山田珠一、荒尾精氏へ書状を出し、林、吉嶋両氏の帰津を送る。中嶋氏より薬箱二個を受取り、上車帰寓。是日書架、薬箱等を修理す。昨午今夜太原府に宿す。

十一日 終日在家。此日佐野氏の信至る。本月七日長崎に帰航せりと。何の意たるを知らず。

十二日 好天。晌午山口外三来訪。吃飯後山

口、吉田二子と前門外の相公戲館に抵り見る。絶世の尤物三人を見たり。暮時帰寓。是日開店の願官より下り来る。

十三日 好天。朝出去公館に抵り、宮嶋氏を叩き留て中飯し、駱亮南翁と談ず。此人書法に精し仕進を潔とせず。口を極て弊政を痛論す。天野恭、菅谷某亦来会。下午帰寓。小雨。

十四日 陰天。朝出て山口外三を同仁医院に訪う。在らず、即ち帰る。

十五日 終日在家。

十六日 好天。正午荒賀直順氏漢口より着す。一路平安、三十八日を費せりと云う。中餐後馬車に乗り公使に抵り、熊坂氏に面し荒氏六条の公署に暫寓の事を届け、同仁医院に抵り山口を訪う、在らず。一書を留て晩間来会を請い、車を馳て六条の公館に抵り投ず。河原君を見て小談、酒を酌て久闊を叙し新旧を暢談す。山口外三亦来る。夜更寝に就く。此日山田珠一の書状及び財津志摩記氏の書到る。

十七日 好天。中餐後荒賀氏を辞て寓に帰る。

十八日 終日在家。

十九日 朝雨。晡時六条胡同に荒賀氏を訪い、終に宿す。

二十日 好天。晡時荒賀氏を辞し上車、同仁医院に來り山口氏を叩き小談、帰寓。

二十一日 下午吉田氏と鶏を携え六条に至り荒賀を訪い、山口外三の来を待ち酒を怙て飲む。豪興勃然、予と吉田と止宿す。

二十二日 朝六条より帰る。晡時宮嶋大八來訪。昨日漢口荒尾及び天津藤田二子の書來る。今日漢口より依頼の六部処分則例を購う。且つ漢口へ返書と天津佐々木、藤田二氏への書状を認め、明日を以て之を郵に附せんとす。

二十三日 下午出去公使館に抵り岸田氏へ送書、書薬の送致と金九十両を急に送らんことを請う。騎驢六条に抵り荒賀を訪う。天津より世良田、伊藤の両子來着、夜宿す。

二十四日 小午騎驢帰る途宮嶋氏を松雪庵に訪う。天野恭亦来る。中餐を吃て帰る。

二十五日 好天。下午六条に抵り荒賀氏を訪い、夜終に宿す。

二十六日 下午六条より帰る。此日店中を糊修し面目を一新す。

二十七日 終日在家。屋内の糊修全く終る。

二十八日 終日在家。店中の装置に従事す。蓋し明日を以て開店の筈なりしも準備全く成らず。四五日を延期す。暮時山口外三來訪。

二十九日

三十日

三十一日

十一月初一日 是日開店を行う。予の燕に入りてより已に一月を費し、初て此結果を見るに至れり。近隣の知人を招き饗す。下午予と荒賀氏は雑踏を避け去て公使館に至り、去て天野恭太郎を訪い小談、帰寓。

初二日 下午出去山口外三の臻るに遇う。共に同氏の宅に至り小談。氏を誘て我寓に帰る。

初三日 天長節。午飯後荒賀、吉田の二氏と公館に抵り、諸子を誘て六条の旧公館に臻り会飲の準備を為す少焉。河原彦太郎、萩原某も亦帰來。萩原氏は浦塩斯德港より黒竜江を遡り、西伯利、蒙古を経て昨日來着せし者なり。其西伯利の塩湖より取り來りし氷塩を見る。殆ど水晶様の看を為せり。夜に入りて飲む。相会する者は河原、萩原の両士官及び山口、宮嶋、荒賀、吉田、塩田等の九人なり。飲啖の間歌う者あり、吟ずる者あり、舞う者あり、躍る者あり。雄興勃然、醉者狼藉す。衆河原氏に抵り枕藉して臥す。

四日 朝山口、荒賀二氏と河原氏を出て帰寓。

五日 好天。是日下午、領事館より漢口荒尾氏の信と上海山内氏の信を送り来る。山内氏の信内言う、岸田翁北京開店の念を絶つ故に、急に閉店して帰滬すべきを告ぐ。其迂闊輕率我意を得ざる甚し。

六日 好天。是日上海山内氏に復するの書を作り之を寄す。書中痛く其妄を弁駁す。且

漢口荒尾氏に一書を寄せ、上海書信の意を告げ山内子に復する書の写を転致せり。午前荒賀氏と進城宮嶋子を訪い、去て公館に抵り右二封の書を出し、菅谷五郎氏を館内に訪い小談、帰寓。晡時宮嶋大八、山口外三二君来訪。

七日 陰天。下午出て宮嶋氏を訪い小談。去て山口氏を叩き、日暮帰寓。是日上海楽善堂より山内崑氏の信二封至る。俄かに閉店の事を止め、送るに薬数十種を以てす。蓋し如此上海にて燕京閉店の義を変じて再び維持の説を立てたる者は、予が客月二十三日の書状に接し、当方の事万事已に整頓に属せしを知ればなり。

八日 雨天。終日在家。

九日 無事。暮時宮嶋氏来る。

十日 早起宮嶋、荒賀、吉田三氏と出で六条胡同に抵り、陸軍人萩野某の帰朝を送らんとす。途中四牌楼に於て之に逢う。宮嶋氏行て之を通州に送る。予輩は河原彦太郎氏を訪う。中餐を饗せらる。晡時帰寓。夜宮嶋大醉して到る。通州帰途吃門にて驢馬より落ちたりと云う。満身泥造の如し。夜我寓に宿す。是日萩野氏に托し東京小原正保氏と天津藤田に一封を出す。

十一日 好天。日曜日。下午荒君と出で公使館に抵り中嶋氏を訪う。宮嶋、菅谷両子在焉。暮時天下郡国利病書三帙を借りて帰る。

十二日 月曜日。好天。下午出で公館に至り、去て天野恭太郎を訪い小談。又た公館に至り喬を叩き、銀十両を借りて帰る。此日山田珠一の信至る。宮嶋、山口両氏来訪。

十四日 火曜日。好晴。下午荒賀君と公館に抵り、上海楽善堂山田氏に一封を寄せ書籍の送致を催す。又た横田三郎氏に一封を寄す。帰途宮嶋氏を訪い、晡時帰寓す。

十三日 好天。休日在家。

十五日 好天。木曜。終日在家、紀行を作る。宮嶋子来訪。

十六日 好天。終日在家、紀行を作る。

十七日 好天。午前公館に抵り菅谷氏を訪い、帰途宮嶋氏に到り吃飯し、晡時帰寓。夜月

明。

十八日 好天。日曜日。下午公館に抵る途中、予に漢口よりの電報を持ち来るに逢う。携て天野を訪い、共に公館に抵り中嶋氏を訪い、晡時帰寓。電文を検す。北京店維持を賛成するの文意なり。是日上海永原、糸川、鐘ヶ江、奥村等の信到る。暮時宮嶋君、山口君来訪。

十九日 好天。終日在家。暮時宮嶋君来訪。夜上海楽善堂山内子に送書し、書物の送致を催促し且つ薬の引札を印刷し送らん事を乞う。

二十日 好天。火曜。終日在家。天頗寒し。

二十一日 寒天。下午使館に抵る。漢口荒尾、井深、井手、緒方、片山諸子及び上海山内氏の予が前信に答弁の書至る。縷々千百言、予直に返書を作る。又た天津藤田捨三郎の信至る。予の借りたる二十六弗は佐々木氏より代価せしと云う。漢口の信に曰く、本年六月伊犁に向いたる浦敬一は甘肅蘭州に抵り大矢□に会するの約なりしも、事齟齬に及び、浦は旅資の出る所無きに苦み蘭州を發し、途中不図昨年北京を出奔せし外務留学生中西正樹に邂逅し、再携て漢口に帰れりと云う。又た北御門、河原等は思々に旅行し、来年五月浦等三人蘭州に再会して伊犁に赴くと云う。又た北御は都合により甘肅より天津に出るやは知れずと云う。中西は漢口より江浙の遊に出懸け来一月帰漢の筈なりと。中野は九州に帰り、前田氏一寸帰熊の筈なりと云う。

此日公使館に抵り中嶋子に面し、過日借る所の郡国利病書三帙を返納し、更に太清一統誌二帙を借て帰る。

二十二日 好。朝漢口荒尾氏及び井深、井手二子への返書を認め之を出す。公館に抵り菅谷子を訪う。宮嶋氏在焉。暮前塩田、荒賀二子と山口を訪う、不在。帰途宮嶋氏を訪い小談、帰寓。此日上海山内氏へ返書し弁駁を試む。

二十三日 好天。下午山口外三氏来る。告て曰く、今日伊犁行の北御門、河原二氏甘肅

より帰れりと。予之を予期すと雖、其意外に早着に驚けり。蓋し昨日着京せしと云う。晚餐後山口氏と出で、驛馬市大街同升店に抵り二氏を見る。蒙冠を戴き羊表を着す。聞く、八月 日蘭州を發し、黄河を下り、道を口外に取り、帰化城、大同府等を経て殺虎口を入り（賀蘭山の下を過ぐる時白雪を見たりと云う）て来れる者なり。帰化城より十五日許にて着せりと云う。予に蒙古牧場の光景及び口外の情を語る。人をして神往々堪へざらしむ。大屋、藤嶋二氏生死詳ならずと云う。夜別後の事を談じ、深更寝に就く。

二十四日 好天。早起二氏を辞して帰家す。此日より天津時報を購読す。下午宮嶋氏を訪い談ず。山口氏至る。公館に抵り熊崎を訪う、在らず。菅谷に抵り小談。宮嶋氏に帰る、晩飯を吃す。山口氏来る。予と共に宮嶋に宿す。

是日漢口荒尾に北御門等の着京を報じ、急に西人の滞在費四十五円を送らん事を請う。

二十五日 宮嶋氏を辞て、公館に抵り熊崎を訪う。北御門、河原等を旧公館に止宿せしめんことを届け、晌午帰寓。吉田氏と驢馬市大街に抵り北御門等を訪い、二人を馬車に乗せ共に六条胡同に抵る。山口氏先ず在り。河原氏に在て晚餐す。宮嶋氏亦来る。予は山口氏に抵り宿す。

二十六日 好天。朝山口氏を辞して旧公館に抵り諸事を照量す。北御門等は当分自炊の事と為せり。中餐後予一人帰寓、沙錫銅鍋等炊事用の傢伙を買い、再び六条に至り、夜荒賀氏と共に宿す。

二十七日 好天。早起六条より帰る途、公館に抵り菅谷を訪う。是日熊本の佐野直喜と弟光彦の書状着せり。小午帰寓す。

二十八日 好天。終日在家。晡時宮嶋君來訪す。

二十九日 下雪、入冬以来初と為す。終日在家、紀行を作る。夜上海樂善堂の信到る。又た薬を送れりと云う。

三十日 晴。下午宮嶋氏臻る。共に六条胡同

に至り北御門、河原等を訪い、終に宿す。

十二月

初一日 朝山口氏来る。朝餐後六条を辞し、山子と朝陽門を上り天文台考場等を一覽し、東便門より下り山口氏に至り、中しょくし、帰途宮嶋子を訪て帰る。此日漢口荒尾氏の信至る。夜天津横田に信を發し、天津にある薬箱一個を転送せんことを托す。

初二日 快晴。下午公館に抵り中嶋を訪い、去て菅谷、塩田二氏を叩き小談。帰りに上海より来れる薬箱一個を中嶋氏より受取りて帰る。

初三日 好天。下午出て六条胡同に抵り河原、河原、北御門、山口、荒賀、吉田諸氏と会飲す。興味快爽、終夜眠らず。

初四日 好天。天明山口氏と共に帰る。終日閑眠す。

初五日 好天。終日在家。

初六日 下午荒賀氏と出て皇居の周辺を遊覽し、晡時帰寓す。

初七日 好天。小午北御門子来る。晡時宮嶋子亦来る。二子終に宿す。夜古今を暢談して深更寝に就く。

初八日 好天。朝北御門等帰る。下午行て北御門を訪い、去て河原彦太郎を訪い談ず。夜河原氏に至り飲む。夜更寝に就く。

初九日 暈天。日曜日。早朝六条より帰る途中宮嶋大八を訪い談じ、中餐後帰家す。上海山内子の書状来る。又々書籍を送りしと云う。糸川、永原、奥村、鐘ヶ江諸子の信も亦至る。

初十日 陰天。終日在家、紀行を作る。

十一日 半晴。午前山口外三子來訪、宮嶋の予に送る所の勝海州翁の断腸之記と云える小冊子を携え来る。中餐後山口、吉田両子と出でて公館に抵り、去て六条胡同に抵る。皆没在家。帰途隆福寺の祭りを見て、帰途横田三郎を公館に訪う。昨日天津より来着せし者なり。天野子も亦在焉。暮時去て宮嶋氏を訪う。北御門、河原、荒賀、塩田の諸君在り小談。北御門を誘て帰寓す。

十二日 好天。下午荒賀君と出ず。宮嶋氏も来らる。共に出でて公館に抵り菅谷子に抵り、晡時帰寓す。

十三日 好天。晌午荒賀、吉田の二君と出でて公館に抵り横田三郎を訪う。宮嶋氏も亦在焉。荒、吉二君と去て六条胡同に至り北御門等を訪う。夜山口外三亦来る。牛を割て飲む。三更北御門、山口二氏と出でて公使館に至り横田を訪う。天野、宮嶋、塩田、田中等の諸子在焉。又た酒を飲む。大に酔う。終に横田の所に宿す。

十四日 好天。朝飯後横田を辞し宮嶋を訪う。北御門在り。中食後共に出でて公館に至り横田を訪い、去て六条胡同に至り、夜に入りて河原彦太郎、北御門、荒賀、河原、山口、横田、天野、吉田、宮嶋の諸子と大に飲む。三更横田、天野、山口の三子と帰り、予は山口の所に至り宿す。此日朝鮮京城栗林次彦に致書、清韓連絡事を為さんことを告ぐ。

十五日 好天。朝山口氏より帰る。

十六日 好天。午前北御門氏至る。宮嶋子亦来る。中食後出でて荒賀氏は共に横田三郎を訪う。在らず。待之て暮に至り、帰寓す。

十七日 好天。小午荒賀子と六条胡同に抵り北御門等を訪い、共に出でて横田氏を訪い晚餐の饗を受く。宮嶋、菅谷二氏亦来会す。此夜北御門大酔漓淋殆ど人事を弁ぜず。予は荒賀、横田二子と菅谷の所に至り宿す。

十八日 好天。朝菅谷氏より帰る。

十九日 終日在家。

二十日 好天。朝北御門来る。此朝皇帝天壇に幸し一泊明朝還幸すと云う。

二十一日 好天。下午公使館に抵り菅谷を訪て小談。帰途天野氏を叩き、晡時帰寓す。

二十二日 好天。終日在家、紀行を作る。

二十三日 好天。下午荒賀氏と横田を訪う。北御門、山口二子亦来る。暮時帰る。

二十四日 好天。朝北御門子来り、荒子と共に彰儀門に遊び、暮時帰る。此日郵便到着す。閉河以来陸路よりするは初と為す。宮嶋来る。

二十五日 好天。漢口荒尾、井手両氏に寄するの書を認む。荒子には鉄道、皇帝天壇幸、馬賊、福州哥老会人名等の各情を報ず。下午荒賀、吉田の二子と出で宮嶋子に至り、相誘て六条胡同に至り、河原彦の招饗に应ず。会者北御門、河原、吉田、宮嶋、荒賀、予なり。夜河原子に宿す。

二十六日 好。朝河原氏を辞し、帰途公館に至り、横田三郎を訪い朝餐し、天津より来れる書籍三個を受取りて帰る。

二十七日 好天。終日在家、紀行を作る。下午北御門生来り、留り宿す。

二十九日 好天。終日在家、紀行を作り、江蘇省の紀事を終わる。

三十日 好天。終日在家。

三十一日 積陰。下午出でて六条胡同河原氏に至り会飲す。集る者は山口、北御門、荒賀、吉田、河原、宮嶋、天野、塩田、河原彦、及予也。九時天野、荒賀、塩田三子と帰り、天野氏に宿す。本夕は二十一年の除夜たり。

小結

以上のような作業をしたおかげで、歴史研究所で宗方資料をながめながらメモを書いたり、コピーをとったりしたまましばらく放っていた勉強を再開するメドを立てることができた。今後、まずは日記を読み進め、関連する時期のところで、論考や報告や手紙を読んで、その時々の方の行動や思想の持つ意味を考え、さらに周辺の人々の動きにも気を配りながら、興亜を叫びながら大陸に渡った多くの日本人の姿を再確認していきたいと思う。

小文を以て、上海での在外研究の事後報告に代えたい。